

## 日本人のみた外国 触れてはいけない話 -- バングラデシュのメキシコ人 (カルチャー・ショック)

著者	山形 辰史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	144
ページ	44-44
発行年	2007-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005173">http://hdl.handle.net/2344/00005173</a>

## 触れてはいけない話

—— バングラデシユのメキシコ人 ——

山形辰史

多くの外国において抱擁は、挨拶の方法の一つとされている。例えば、英語で *amis length* とは「よそよそしい」ことを指す。抱き合うのが当たり前であるような社会では、腕の長さ (*amis length*) は、充分遠い距離と見なされているようである。

しかし、頭でそう分かっているも、身体は言うことを聞かないものである。私も海外に行けば、男性のみならず女性とも、挨拶としての抱擁を交わすことがある。しかし、それには努力が要る。いや本当は、こちらから抱きつきたい、と思う場合があったとしても、習慣がそれを許さない、と言うべきであろう。その人の好き嫌いを問わず、誰かに触れられると、初動としては身震いが起こってしまうのが、私の常である。二〇〇〇年にバングラデシユの首都ダカで一年間生活した。簡易ホテルに住んでいたのだが、低所得国バングラデシユだけあって、多くの国際協力専門家が世界各地から滞在しに来ては去っていった。皆、数カ月間を単身で過ごすわけで、それぞれ重要な任務は抱えているものの、そればかりやっついては身体も頭も保たない。そこで、専門家同士でパーティーをしたり、食事をしたり、出かけたりにすることがあった。そのような専門家の一人にガブリエラさ

んというメキシコ人がいた。彼女は人口・家族計画分野の専門家で、南南協力を志向する国連機関に勤めていた。バングラデシユはおろか南アジアには来ること自体初めてで、周囲の専門家が何かと世話を焼いていた。グラマラスな美人であるだけでなく、いわゆる「天然ボケ」というのであろう、英語の使い方や何かで、皆が微笑んでしまうような間違いを犯しても許してしまえるような愛嬌があった。

メキシコ人のガブリエラ（通称ギャビー）にとつて、抱擁は単なる挨拶である。また、誰かに話しかけるときに手でその人に触れるのはごく普通の所作である。しかし皆さんはどうだろうか。私の場合、会話中に腕など触られると、国際的にはごく当たり前のことと知りつつ、身体は微妙にピクリと反応してしまうのである。向こうは触れただけで身体をこわばらせる反応を予想していないので、怪訝そうな顔をする。すると、既にそのゲストハウスに滞在して数カ月経つアメリカ人らが、「ギャビー、別にあなたが嫌いなんじゃないのよ。日本人はね、触られることに慣れていないのよ」と説明してくれる。深くうなづく私。「へー、そうだったの。じゃあこれからは気をつけるわ」とギャビー。

しかし彼女も自分の習慣を容易には変えられない。例えば普通の会話の中で「タツフミ、貴方はどう思うの？」ベタ。ピク。「あーらごめんさい！ また触っちゃったわ」という仕儀に相成る。

そんな中、何人かの専門家とのたわいのない電子メールのやり取りの中でギャビーが、おそらくは私に対する親しみを込めて *Tatsumi the Unouchable* と呼びかけてきた。彼女にしてみれば「触ってはいけないタツフミへ」というぐらいの意味だったのである。英語では名詞に *able* と形容詞をつけて、その名詞の対象者の人となりを表すことがあるからである（例えば *Alexander the Great* 偉大なるアレキサンダー、*Alexis the Under King*）。しかし南アジアで *the un-touchable* と言えば、歴史的に差別されてきた「不可触賤民」と取るのが普通である。メールを読んだ専門家達は大いに喜び、はやし立てたのであった。

子どもの頃、私はタツチャンと呼ばれていた。だから本当はタツチャブルなのだけれども、いまだ心技体が一致する境地には達していない。Body and Soul (身も心も) とは、なかなかいかないものである。

(やまがた たつふみ／アジア経済研究所 開発研究センター)